

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室(加藤) e-mail:sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



田植祭(伏見稲荷大社)

http://inari.jp/c_sairei/index.html

中国稲作起源論

—「いつ、どこで?」から「なぜ、どのように?」へ—

中村慎一(金沢大学人間社会学域人文学類)

中国稲作起源論

—「いつ、どこで？」から「なぜ、どのように？」へ—

中村慎一（金沢大学人間社会学域人文学類）

去る1月27日、「イネ班」の活動の一環として、中国から先生方をお招きし、研究会《中国の稲作考古学—近年の展開—》を開催した。中国からお越しいただいた鄭雲飛（浙江省文物考古研究所）、丁金竜（蘇州博物館）、靳桂雲（山東大学）のお三方に加え、地球研に滞在中であった趙志軍さん（中国社会科学院考古研究所）、そして金沢大学に留学中の秦嶺さん（北京大学考古文博学院）の参加もあり、現在の中国の植物考古学研究をリードする研究者が一同に会する得がたい機会となった。本来であれば、そこにさらに顧海濱さん（湖南省文物考古研究所）が加わるはずであったが、前日、長江中流域が大雪に見舞われ、飛行機が欠航となったため長沙から上海へ出ることができず、来日が叶わなかった。彭頭山、八十垱や城頭山の状況について詳しくお聞きしたかっただけにたいへん残念であった。今後のチャンスに期待しよう。

佐藤先生のご挨拶、中村からの趣旨説明に続き、中国の先生方からの報告があった。トップバッターは鄭雲飛さん。本来は農業史がご専門であるが、宮崎大学に留学され、藤原宏志先生の下でプラントオパール分析を学ばれた方である。テーマは『浙江省における稲作起源研究の進展』。河姆渡遺跡発見の後、長らく時代的にそれを遡る検出例がなく、長江中流域に中国稲作起源地のお株を奪われた観のある浙江で近年相次いで発見された上山遺跡（10000年前）、小黄山遺跡（9000年前）、跨湖橋遺跡（8000年前）のイネ遺存体についての紹介であった。籾の形状、



田螺山遺跡出土の炭化米（鄭雲飛氏提供）

小穂軸脱離痕の特徴、プラントオパールの形態などを根拠に、浙江の稲作が1万年前にまで遡るとする持論を展開された。また、同時に紹介された田螺山遺跡（河姆渡文化）で最近検出された「稲作遺構」はたいへん興味深いものであった。

続いて丁金竜さん。1990年代半ば、藤原宏志先生を団長として実施された江蘇省草鞋山遺跡馬家浜文化水田址の共同調査に参加されたメンバーのお一人である。その後、ご自身が調査を担当された綽墩遺跡（馬家浜文化）と澄湖遺跡（崧沢文化）で水田址を掘り当て、ごく最近では、草鞋山遺跡の別地点でも水田址の検出に成功した中国における水田址調査の第一人者である。テーマはずばり『江蘇省蘇州地区発見の水田址』。綽墩や澄湖の未発表の写真を数多く紹介され、初現期水田の構造を詳しく説明された。ご自身は生粋の考古学者でありながら、遺跡の調査・研究には自然科学諸分野との協働が欠かせないと力説された点が印象的であった。



昆山綽墩遺跡の馬家浜文化水田址（丁金竜氏提供）

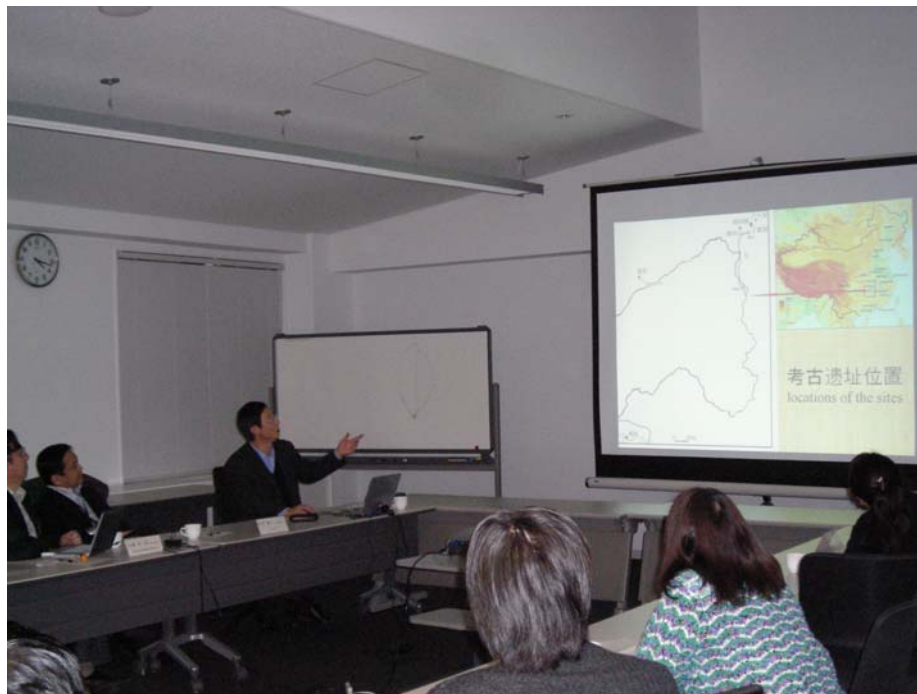
靳桂雲さんはもともと花粉分析による古環境復元を専門とされていたが、近年ではプラントオパールや種実の分析に徐々に研究の焦点を移されている。顧海濱さんとともに中国の植物考古学界を代表する女性研究者である。山東といえば、済南月莊遺跡（北辛文化、7900年前頃）での炭化米の検出、膠州趙家莊遺跡での竜山文化水田址の検出などで近年にわかに脚光を浴びている地域である。



報告される靳桂雲先生（右端）

しかし、『山東省における稲作考古学の新成果』と題するその報告は、話題の遺跡をセンセーショナルに取り上げるといったスタイルではなく、山東の先史時代稲作を中国稲作史の中にいかに正当に位置づけるかという問題に主眼を置く堅実なものであった。

最後は、地球研では Jimmy さんの愛称で親しまれる趙志軍さん。北京大学考古学専業のご出身であるが、後に渡米され、ミズーリ大学の D. M. Pearsall 教授のもとで植物考古学を修められた方である。当初はプラントオパール研究からスタートされたが、現在は種実分析が中心的課題のようである。社会科学院考古研究所という国の機関にお勤めであるという利点を活かし、中国全土のさまざまな資料にアプローチできる点が強みである。今回の報告は『賈湖遺跡の植物考古学的研究』。賈湖遺跡といえば、物質文化の面では黄河流域のアワ作を基盤とする裴李崗文化の遺跡でありながら、イネの栽培が行われていたことで知られる遺跡である。すでにその発掘報告書は刊行されているが、その後、同氏らが進めている植物遺存体の再調査で、イネ以外にも多種多様な採集野生植物が利用されていたことが判明しつつあるという。



報告される趙志軍先生（中央）

これら 4 名の中国人研究者の報告を聞いて強く感じたことは、中国の稲作起源論がもはや「いつ、どこで？」の段階から抜け出し、「なぜ、どのように？」の段階に進みつつあるということである。「〇〇最古」を追い求める「お国自慢の考古学」が存在するのは中国も同じである。自分の地盤で古い時期のイネ資料が出土すれば、「中国最古」の可能性を追求してみたいくなるのは人情である。しかし日本の場合とは異なり、そもそも野生イネが自生する中国ではイネ資料の出土＝イネの人工栽培とはならないのはいうまでもない。そこで一步踏みとどまり、冷静に見極める必要がある。そんな当たり前の認識がずいぶんと広まってきたのを感じる。アジア稲作起源の問題は、完新世の環境変動に対して野生イネがどのような振る舞いを見せたか、そしてヒトはどのような文化的適応でそれに応じたか、といった観点から推し進められなければならないはずである。そのためには、高精度の古環境復元、動物遺存体まで含めた自然遺物の定性・定量分析、出土人骨の古栄養学的分析やアイソトープ食性解析など、多岐にわたる自然科学諸分野と考古学との協働が必須なものとなる。そんなことを痛感させられた研究会であった。